



No.3(2006年11月)



保証人の皆さまへのアンケート: 結果の概要

高木英至

(教養学部副学部長、教育協会常任理事)

埼玉大学教養学部は、今年6月に学生の保証人の皆さまに「学業成績表送付希望確認書」などの書類を送らせていただきました。その折に、保証人の皆さまへのアンケート調査票(自記式質問紙)を同封いたしました。このほど、そのデータを集計、分析しましたので、結果の概要をお伝えいたします。

アンケートの企画

埼玉大学教養学部はこれまでも、学生(学部生・大学院生)へのアンケート調査をたびたび実施し、そのご意見、要望などの把握に努めて参りました。調査結果は学部における具体的措置をとる際の参考にさせていただいています。

今回の調査はご意見を伺う機会を保証人の皆さまにも広げる最初の試みとなりました。最初であることもあり、今回の調査の目的は保証人の皆さまのご意見の大まかな傾向を知ることになりました。アンケートは次の4つの問からなっています。学生の性別・学年(問1)、大学教育への一般的な考え方(問2)、教育面での要望(問3)、要望の自由回答(問4)です。

これらの質問項目によってわれわれが主に把握したかったのは、次の2つでした。

第1は、学生を指導するにあたり、保証人の

皆さまが大学に対し、高校までと同様に、基本的に学生を子供として指導することをお望みであるのか、あるいは逆に、学生を大人として扱うことが重要とお考えであるのか、という点です。この点はわれわれの指導の方針を決める上で基本的に重要な判断であると思えました。第2は、教育内容において、保証人の皆さまは「社会で即戦力となる知識」を重要と考えるか、あるいは基礎学力にあたる広い教養を重視されているのか、という点です。

結果の概要

今回のアンケート調査は、保証人をつけることを求めている外国からの留学生を除く、全在学生の保証人の皆さま、計812名を対象としました。そのうちちょうど400名の方から回答をいただきました。回収率は約5割(49.3%)です。回収率は1年生の保証人の方が高く(71.6%)、4年次以上の学生の保証人の方で最も低くなっています(30.3%)。女子学生の保証人の方(47.5%)より男子学生の保証人の方が若干、回収率が高くなりました(52.1%)。

問2では「a. 大学に在学する期間は、就職や大学院進学のための準備期間である」といった6つの項目(文)を肯定する程度を伺っています。

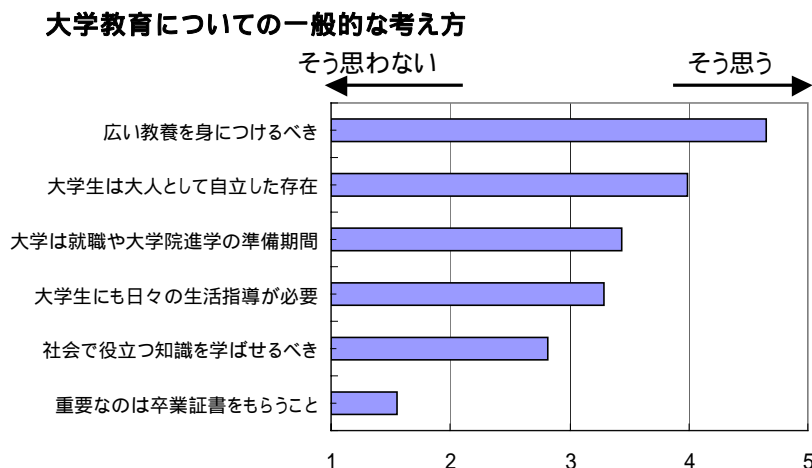


図1: 考え方平均値(問2)

6つの項目を肯定する程度の平均値を棒グラフにしたのが図1です。図1の横棒が3を超えている項目は、平均的に保証人の皆さまが肯定している事項、3に満たない項目は平均的に否定的である事項、ということになります。図1に見られるように、「d. 大学生の時期には、自由な時間を使って広い教養を身につけるべきだ」や「b. 大学生は大人として自立した存在だと考えるべきだ」といった考え方が平均的に強く支持された格好になりました。逆に保証人の皆さまからあまり支持されなかったのは、「e. 大学生にとって重要なのは、何を学んだかということより、卒業証書を得ることである」でした。「c. 大学では、何の役に立つかわからない知識よりも、社会に出てから役立つ知識を優先的に学ばせるべきだ」という意見も支持の程度は低いものでした。

より詳しい分析では、「社会に出てから役立つ知識を優先的に学ばせるべき」と考える傾向は女子学生の保証人の方が男子学生の保証人より強いと分かりました。その他の項目では、学生の性別、学年による統計的に有意な差は見出されません。

問3は教育面で何が重要かを問うことを目的としており、「a. 幅広い授業を提供すること」といった8つの事項の重要度を伺っています。その結果をまとめたのが図2です。図2を見ると、成績

を知らせるなど、保証人の皆さまへのサービスに該当する事項よりも、「教育内容の専門性を高めること」や「幅広い授業を提供すること」といった、大学として行うべき基本的な事柄を、保証人の皆さまが平均的に重要と思う程度が高いことが分かります。

詳しく分析すると、「学生の成績を保証人に知らせること」を重要と考える傾向は、男子学生の保証人の方が女子学生の保証人より強いことが分かりました。その他の項目では、学生の性別、学年によって統計的に有意な差はありません。

このアンケートの最後の問4では、保証人の皆さまに大学に対する要望を自由に記入していただきました。全員が問4に記入して下さった訳ではありませんが、記入された文字数の総計は8500字ほどであり、現在、分析を進めております。いただいたご要望は保証人への対応の仕方、大学・学部のあり方、カリキュラムへのご意見、カリキュラムへのご不満、学生指導のあり方、授業運営、就職支援、設備面へのご要望、このアンケートへのご批判など、多岐にわたります。お書きいただいたことの中には、当方から個別にご説明すべき点多々、含まれています。

これらのご要望についてもこのニューズレターでご報告申し上げるべきではございますが、量的に膨大になりますので、埼玉大学教養学部教

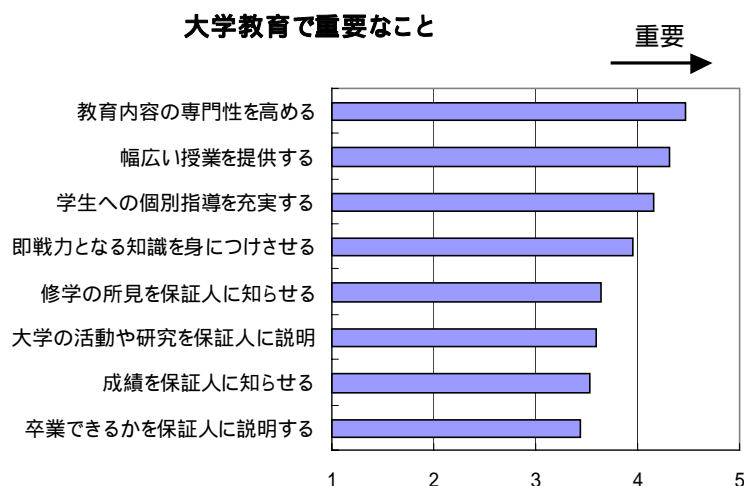


図2：重要性評価平均値(問3)

育協力会のホームページ

(<http://www.kyy.saitama-u.ac.jp/~supporters/>)
 において詳述いたします。11月末には完成する
 と思いますので、ご覧いただければ幸いです。

アンケート結果のメッセージ

大まかに見て、このアンケート結果からわれわれが受け取るべきメッセージは次のことであると、私どもは考えています。

第1は、保証人の皆さまへのサービス以上に、本業たる学生への教育そのものをしっかり行うことへの要望が強かった、ということです。このメッセージをしっかりと受けとめ、カリキュラム委員会と進路指導委員会を中心に、今後の教育改善に取り組んでまいります。

第2に、即戦力となる知識の提供以上に、教育の専門性や幅広さの重要性が強調されたことです。もともと本教養学部は、職業訓練学部ではなく、すべての学びの基礎となる力を養うことを目指す学部です。直接的には役に立たなくても新たな学びを進める上で基礎となる力を育むこと、人生を豊かにするための教養を涵養することをその目標として来ました。われわれはこの方針の良い面を継承するとともに、現代社会の要請に応じた基礎力の展開を不断に検討して参

ります。

第3は、保証人の皆さまは学生を大人として扱うのが妥当とお考えである同時に、いろいろな面での個別指導の充実を求める要望が強い、という点です。現在、進路指導については全学と学部の両方について指導体制を整えつつありますが、学部内での勉強指導についても進路指導委員会を中心に整備の検討を進めております。新たな体制を開始するにはまた皆さまにお知らせすることになると存じます。

改善に向けて

今回のアンケートは保証人の皆さまのご意見の大勢を把握する上で極めて有意義であったと考えています。アンケート結果の概要は全学の部局長会議においても報告しており、また本学部の将来計画委員会の基礎資料として活用させていただきます。次年度以降も、今回の経験を踏まえて定期的に保証人の皆様からご意見を賜り、具体的な改善措置の参考にいたします。

今回のアンケート結果を含め、埼玉大学、および教養学部に対してご意見、ご批判がある方は、このニューズレター末尾の連絡先まで是非お知らせください。



教養学部生の就職事情：

結局は「基礎学力」

野中進

(教養学部助教授、進路指導委員長)

就職決定率の好転

ここ二、三年で大学生の就職決定率はずいぶん良くなってきました。わが教養学部でも、一昨年度(平成 16 年度)は 90 パーセント、昨年度(平成 17 年度)は 80.1 パーセントと以前にくらべれば好転しました。いわゆる大企業への就職がまだ少ないことや、年度によって就職決定率に上下があることなど、取り組むべき問題はいくらかありますが、それでも「先が見えてきた」という感触を持てるようになっていきます。「先が見えてきた」とは、「学生がその気になってしかるべき就職活動をすれば、かならずどこかには決まる」という正常な状態に戻りつつある、ということです。

採用の方針

ご存知の通り、日本の企業社会は大規模な「世代交代」を迎えつつあり、それが大学生の就職状況の好転につながっています。それに関連してか、企業側の人事採用の方針にも変化が見られるようです。わが教養学部の進路指導委員である高橋助教授がある大手就職情報企業(かりに R 社とおきます)の方と懇談したさい、R 社の方は次のような点を強調しました。

- (1) 今、学生の就職状況に関しては追い風が吹いている。いちばんいけないのは、何となくフリーターになってしまうこと。とにかく正式に就職して社会に出ることが大切だ。そしてひとつの職場で最低三年は働くこと。「第二新卒」という流行語に惑わされてはいけない。
- (2) 文系学部の就職について言えば、専攻分



野の違いによって就職に関して有利不利の差が出ることは少ない。企業が見るのはその学生の「今後の可能性」であり、たとえば「普段の生活の中で何を考えてきたか」といった話がきちんとできるかどうかを見ていたりするものだ。

- (3) 調査によると、重要なアピールポイントが何かに関して、企業と学生のあいだに認識のずれがある。企業が重視する項目のトップは「人柄」であり、学生が重視されることを望む項目のトップは「アルバイト経験」だという。

文系学部の就職

どれも興味深い話ですが、今回はとくに(2)について考えてみましょう。というのも、「普段の生活の中で何を考えてきたか」という問題は、大学での勉強と直結するものだからです。教養学部の学生たちが日頃どのような勉強をし、どのようなキャンパス・ライフを送っているか、ふり返ってみる必要があります。

私は埼玉大学で教えるようになって九年になりますが、最近、学生についてハッキリ言える「法則」があります。それは、次のような学生

は勉学面でも伸びないし、就職活動でも苦戦を強いられるということです。きちんと統計を取ったわけではないので、主観的といえど主観的ですが、何人かの同僚の教員にも話して「自分もそう思う」と言われたことばかりです。これも箇条書きにして挙げてみましょう。

傾向と対策

(1) 本を読まない。これはいつの世も嘆かれていることではありますが、しかし最近の学生の本を読まないことと云ったら、尋常ではありません。私はよく学生に「大学生のくせに本を読まないのは馬鹿者である。いま読まずにいつ読むのか」と言います。ここは「教養」学部なのだからなおさらです。もしお子さんがご家庭で本を読んでいるのを見たことがない、ということでしたら要注意です。

(2) 新聞を読まない。「3年生になったら、就職活動に控えてN経新聞を読むのは基本だ」というようなことがよく言われますが、それより「大学生なら、何であれ新聞を読むのは基本だ」と言うべきです。ふだん社会の動向に関心を示さない学生が、付け焼刃で経済紙を読んだところで、見る人が見れば簡単に分かりません。これも、もしお子さんが新聞を読んでいるのを見たことがない、ということでしたら要注意です。

(3) 大学の勉強のしかたがつかめていない。これは全面的に教員側の問題ですが、2年生の後半や3年生になってさえ、授業のノートの取りかたやレポートの書きかたが身につけていない学生を散見します。そうすると結局、他人の話を聞き、それに対して自分の考えをまとめるという能力が育ちません。この種の指

導を1年生のうちから徹底的に行う教育システムが必要であろうと個人的には考えています。

(4) 他人との議論を嫌う。上記の三項目と密につながっています。日頃本を読み、新聞を読み、またそうして得た情報の処理方法を体得している学生は、他人と生産的な議論ができます。そうした学生は相手の言っていること、言いたいことを正しく理解し、適切な受け答えができるので、大学の演習でも就職の面接でも、高い評価を得ることが多いのです。先ほど話題にした、「普段の生活の中で何を考えてきたか」という話がきちんとできるかどうか、というのはこうした能力のことだと思います。

以上のようなわけで、結局は「基礎学力」、という基本に立ち返ります。われわれ教養学部の教員はこの基本を外さないように、進路指導につとめて行きたいと考えております。保護者の皆様のご理解を賜れば幸いです。

また、学生さんの勉学・進路その他でご相談なさりたい方は、いつでも教養学部進路指導委員会までご連絡くださいますようお願いいたします。

(電話：048.858.3042、または電子メール：gakusei@post.saitama-u.ac.jp)

野中進：ロシア・チェコの文化研究：「歴史と超越：カガンとバフチン」(『ミハイル・バフチンの時空』、せりか書房、1997)、『ミハイル・バフチン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』の項目(『ユリイカ 総特集 20世紀を読む』、青土社、1997)など多数。



おめでとう！教養学部成績優秀賞

編集部

顕彰制度への援助

「埼玉大学教養学部教育協力会」は、成績優秀学生の顕彰制度への援助をおこなっています。埼玉大学では、平成16年度入学生以降を対象にGP(グレードポイント)制度という成績評価のシステムを導入いたしました。この制度によって従来に比べ細かな評価の比較が可能になりました。在学生の顕彰制度はこれを受けて発足しました。毎年、学年ごとに成績優秀者を選び、関口順学部長から賞状と副賞(図書カード一万円分)を贈呈します。この図書カードは、教育協力会が教養学部資金援助して購入しています。本年の5月26日には新3年生を対象に、各専修1名、計5名が「教養学部成績優秀賞」を受賞しました。来年以降、新4年生(4月)、4年生(3月の卒業時)へと、対象者を順次拡大していきます。

平成17年度教養学部成績優秀者のコメント

遠藤 友也(文化環境専修課程:コミュニティ・デザイン専攻)

本当のことを言うと、賞をいただくまでこのような褒賞制度があるということを知らず、また自分の成績がそんなに良い方だとは思っていませんでした。受賞のお電話をいただいたときはとても驚きました。

これからも良い成績が残せるよう、がんばりたいと思います。

ありがとうございました。

菊地 信義(現代社会専修課程:国際関係論専攻)

大変光栄に存じます。

特に、第一回目ということで、より一層名誉に感じます。

この賞に恥じぬよう、これからも、勉学に励みたいと思います。

河本 純(哲学歴史専修課程:歴史学専攻)

何やらおかしな金の使い方が学内、特に正門前などに目立つ昨今、このような報奨は中々粋なはからいだと思います。何処ぞの蛍光色の物体よりも、その多少はあれ、学生のやる気を引き出すのではないのでしょうか。

関上 知晶(ヨーロッパ文化・アメリカ研究専修課程:アメリカ研究専攻)

成績優秀賞の受賞のお知らせを聞いたときには、「私が……？」という感じで本当に驚きました。このような賞があることを正直言うと知らなかったもので、なおさら驚きました。

大学での勉強は誰かとの競争ではなく自分のペースでマイペースにという姿勢でこれまでやってきたので、それがこのような形で評価されるのは非常に嬉しいです。

本当にありがとうございました。

これからもこの賞の受賞に自信を持って勉強していきたいと思います。

吉見 奈央(日本・アジア文化専修課程:日本文化専攻)

賞をいただけるとは夢にも思っていなかったので、知らせを聞いたときは、本当に驚きました。又、努力してきたことが評価されたのだと思うと、とても嬉しいです。

私は今、学ぶことをとても楽しく思っています。このように思えるのは、家族や友達、そして恵まれた環境のおかげです。本当に感謝していま

す。

これからも、埼玉大学で、知識を深め、視野を広げ、学びの楽しさを味わっていきたいと思います。先生方、御指導の程よろしく願いいたします。

今回は本当にありがとうございました。



「リーガー向け「教養講座」の講義を行って

岡崎勝世

(教養学部教授、前学部長、西洋史学)

楽しかった「教養講座」

今回の「教養講座」を担当して、今、私に残っている感想は、二点あります。まずはとても楽しく講義をさせて頂いたということ、そして、そのような講義ができたのは、受講生だった大宮アルディージャの藤本主税、小林大悟の両選手が、大変よい「学生」だったおかげだということです。

埼玉大学は地域貢献を目的とする様々な試みを行っていますが、今回の講義は、その一環をなすものでした。この講座は、埼玉大学と地元J1チーム、大宮アルディージャ、浦和レッズとの協力協定にのって企画されたものだからです。これまで、両チームの協力をいただいて、埼玉大学では学生や一般の方々を対象にした「スポーツ・マネジメント概論」の講義が開かれ、多くの聴講生を集めてきました。そこで教養学部では、今度は大学側からの両チームへの貢献をと考え、このたび、「欧州で選手として生きるための教養講座」を計画したわけです。サッカーは日本で行われている数あるスポーツの中でも最も



国際色豊かなスポーツですし、また、ヨーロッパの本場で活躍する日本人選手の多いことも特徴です。そこで、両チームの多くの選手が、欧州での活動など、日本のサッカー界を代表する選手になってほしいとの願いから、そのための基礎教養を講義することを目的に計画されました。内容は「欧州についての知的教養」と「日本についての知的教養」の二部に分かれており、歴史・地理・思想・文化などの各側面から、合計10名の教養学部教員が、各々の専門研究に基づいて講義することになっています。計画を両チームに伝えたところ早速の応募があつての開講でした

が、現在もまだこの講義は続いています。応募された選手の怪我や試合の都合などがあり、スケジュール調整が大変なようです。

地域貢献のために

第1回の講義は6月22日、午後3時から5時までの2時間でした。私はたまたま専門が西洋史ということで先頭を切って講義するということになりましたが、引き受けはしたものの、スポーツ選手相手の講義の経験などは全くなく、しかも、たった2時間でヨーロッパ史を語るとは無謀とも思われて、実は内心大変に困っていました。しかしともかくも、日本におけるヨーロッパ観の変化(追いつき、追い越す対象としてのヨーロッパから、「地球世界」における一地域としてのヨーロッパへ)、ヨーロッパの歴史については、その柱の一つであるキリスト教の歴史を軸に、それをできるだけ現在のヨーロッパ人の実生活に即して、具体的に話そうと考えて当日を待ちました。

世界で活躍する選手のために

講義は、両選手が最高の講義の聴き手だったおかげで、楽しいものでした。特に、用語や筋道について率直な「わかりません」という質問があったことは、こちらとしては話を理解してもらっていることを確認しながら進めることができたということで、充実感を持って終わることができました。質問は、「資本主義とは何か」といった基本問題や現今の文化摩擦の問題から、話題の『ダ・ヴィンチ・コード』は歴史書かどうか(歴史書ではなく文学書だと回答)などといったことまで、多岐にわたっていました。特に文化摩擦の問題は、外国での選手生活を視野に入れている両選手には、関心が深かったようです。この点については、外国に行った場合の一般的な心得として、現地の人々が尊重している事柄を、理解できなくても

まずは尊重すること、そこからゆっくりと自分の考えや態度を育てていくべきだという私の考えを話したり、一神教のもつ、日本人にとって理解しにくい厳しさなどを種々話したと記憶していません。

あつという間の2時間

こんなわけで、結果的には、結構盛りだくさんの内容になりました。途中「休憩をいれますか」と聞いたところ「いいません。続けてください」という返事で、結局、講義はハーフタイムなしということになりました。

終わったあと朝日新聞と産経新聞の記者のインタビューがあり、質問は、「今後のプレーに役立ちましたか?」というものでした。故意にはずしたこの質問にも、「人間の幅が広がるとうれしいが、その一つのきっかけになったと思う」という、堂々たる回答でした(朝日は26日、産経は27日、各朝刊に記事を記載)。その後、両選手のホームページにこの講義への言及があることを聞き開いて見たところ、口をそろえて「おもしろかった」、「2時間があつという間だった」と書いてありました。多少おっかなびっくりで始まった講義でしたが、少しは役に立ったのかなと安心しました。今後も、なお浦和レッズの選手への講義が残っています。講義は、筋は同じでも、話し手と聴き手の関係次第でいかようにも変化します。今度はどんな講義になるか、楽しみにしているところです。

岡崎勝世:著書に『世界史とヨーロッパ』『聖書 vs. 世界史』(以上 講談社現代新書)、『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』(勁草書房)、『図説ユニバーサル新世界史資料』(共著 帝国書院)など多数。



「ママチャリ」でいく北京の旅

出島一喜（教養学部3年 日本・アジア文化専修）

北京へ行くぞ

私は今年の夏に北京に行った。飛行機に乗れば数時間で行くことのできる距離だが、私は自転車(ママチャリ)と船に乗って行った。この話を人にすると、大抵「一人でいったの？」と聞かれるが、一人で行くに決まっている。こんなことに付き合うほど暇(バカ?) な人間はそうそういない。この無謀とも言える計画を立てたきっかけは、ほとんど思いつきだ。最初はただ漠然と外国に行きたいと思っていて、樺太にでも行こうと考えていた。しかし、ある日ネット上で、自転車で北京に行った人の話を見つけた。そこで私は「この人もできるなら自分にもできる。まして自分は東アジア文化専攻の学生じゃないか」と目的地を北京に変更した。

ルートは下宿(さいたま市)を出発して下関で釜山行きの船に乗り、釜山から仁川へ行って天津行きの船に乗り、北京に着くというものだ。帰りは天津から神戸までは船で、神戸から埼玉は自転車だ。日程は往復でおよそ一ヶ月の予定なので、夏休みに行くしかない。それも9月の半ばに集中講義があるのでそれまでに帰ってこなければならない。時間的縛りもあったが結果的に8月9日に出発し、9月2日に帰ってくるという24日間の旅になった。

生活の様子を日本、韓国、中国にわけて説明すると、日本での食事は主にコンビニのおにぎりやパン、ファーストフードだった。寝床は宿泊費を抑えるために道の駅や公園で新聞紙を敷いて野宿をしていた。往路の日本で大変だったことは暑さである。真夏の太陽の下で自転車をこいで

いるとのども湯くし、日焼けもする。今ではだいぶ薄くなったが、帰ってきたばかりの頃は体にクッキリと日焼けのあとが残っていた。復路の日本で大変だったのは膝の痛みだ。日本に帰ってきたという喜びではしゃいで自転車を飛ばしすぎた結果で、帰ってきてからも数日痛みが引かなかったくらいだ。

まずは韓国

韓国での食事も主にコンビニで買っていた。韓国語は今年から授業を取ったばかりなのでラベルも読めず、おにぎりを買うときは毎回「中身は食べてのお楽しみ」という状態だった。本当ならもっと韓国料理を食べてみたかったが、言葉がわからないので注文や支払いのときに面倒だと思って料理屋に入ることを避けてしまった。今思えばもったいなかった。寝床は一回だけ野宿をしたが、それ以外は一応ホテルに泊まった。韓国で大変だったのはやはり言葉がわからないということだ。日本の下関港で周りが韓国語と思われるものを話していたときは、「おぉ、すげえ」と思っていた。しかし実際に韓国の釜山港に着いてみると周りの話も案内板もみんな韓国語な上に右も左もわからず一人ぼっちで心細くなり「このまま船に乗って日本に帰ってしまおうか」と思ったくらいである。

道を聞くときも一苦労で日本語や英語が少しできる人ならばよかったが、それ以外の場合は言葉では無理なので地図上の行きたい場所を指差し、方向を指差すというジェスチャーを使った。こんなことでどうにかなるのかと思ったが案

外どうにかなるものだ。ホテルの交渉は意外と簡単だった。フロントに行けば従業員が動いてくれる。料金だけはジェスチャーだけで不安なので紙に書いて確認した。しかし私は日本でホテルを取ったことが無かったので、初めてホテルを取るときはちょっとドキドキした。

さあ中国へ

中国では料理屋やファーストフード店に入って食事をした。中国語は大学1年から学んでいるので少なからずできる。聞き取れなくても紙に書いてもらえば大体わかるし、書いてもらってわからなくても辞書を引けばわかるので言葉ではそれほど苦労しなかった。

寝床は韓国と同様に野宿は一回だけでそれ以外はホテルだ。中国で大変だったことは入国してすぐに両替できなかつたことだ。天津港で両替するつもりだったが両替所が見つからなかった。港の近くの銀行で30分近く待たされた挙句両替を断られたり、別の銀行では米ドルじゃないと両替できないと言われてたりした。幸い埼玉を出発する前に友人がいくらかの人民元を餞別にくれたので、北京で両替できるまではその金でしのぐことはできた。

今回の旅でよかったことはいろいろな人に出会えて助けてもらったことだ。日本では山梨から京都まで自転車で行って、帰りは京都から仙台までヒッチハイクで行くという大学生、気ままに野宿をしながら釣りをしてまわっているおっちゃんに会った。それから東京から京都まで自転車で行った友人の埼玉大生と京都で落ち合った。いつもと違う場所で会うと何か新鮮な感じがすることを発見した。韓国では「さよなら」と日本語で送り出してくれたホテルの従業員(かたことでも母国語で話しかけられると嬉しいものだ)、雨の中で道を聞くと自分ではわからないからとわざわざ他

の人にまで聞いてくれたおばちゃん、そしておばちゃんに聞かされただけに熱心に地図まで書いてくれた電気屋さん、何故だかわからないがチョコレートを無料でくれたコンビニの店員。中国では埼玉に住んでいるがちょうど里帰りしているという中国人、所持金も少なく行くあてもない私に料理屋と野宿しても比較的的安全なところを教えてくれた親子。正直言うと出発前に「優しすぎる人は危ない」と聞いていたので最初はこれらの人たちを疑っていたが、今思えば疑ってしまって申し訳ないくらいだ。

申し訳ないといえば迷惑をかけまくった友人たち対してだ。私のことを心配しているのに電話もほとんどかけず、忠告をしてもほとんど無視していた私に最後まで愛想をつかさずにいてくれたからだ。それから親に対しても。今回の旅のことは北京に着くまで親には内緒にしていた。それは行く前にこのことを伝えたら反対されるだろうし、北京にさえ着いてしまえばもう文句も言えまいと考えたからだ。でもこんなバカなことを許し、丈夫な体に生んでくれた親には感謝している。

これが私の初海外だった。韓国のコンビニの前には机と椅子があったり、中国でも意外と電動自転車が走っていたり、韓国も中国も車が右側通行だったり日本と違うと思うことがいろいろあった。日本に帰ってきてから「日本は暮らしやすいなあ(そりゃ20年以上暮らしているし)」と改めて思った。細かいことを書くとキリがない。初めてのことだし、小泉元総理が靖国参拝を行った後の韓国、中国ということで不安は少なからずあった。毎日ひたすらママチャリのペダルをこいでいると「何でこんなことしているのさ?」、「やらなきゃよかった」と何度も思った。今でさえ「バカなことしたなあ…」と思っている。でも、バカなことだってやり遂げると意外と自信になる。また機会があったらどこかに行ってみよう。



研究授業報告:

佐々木照央 「欧米文化入門」

報告: 有賀夏紀 (教養学部教授、FD委員長)

2006年度第1回研究授業および検討会が6月30日(金)10:20~11:50教養学部21番教室で行われました。授業科目は「欧米文化入門(エスペラント語)」担当教員は佐々木照央、出席受講生は23人でした。教員も10名参加しました。

テキストはハンス・クリスチャン・アンデルセンの作品「ひなげし」のエスペラント語訳を用い、英語訳、ドイツ語訳、フランス語訳、日本語訳のテキストと対照していきました。学生がエスペラント語で教員に氏名を聞かれて名乗った後、エスペラント語のテキストを音読し、それを日本語に訳しました。

授業はユニークな方法によって進められていきました。学生が、訳したエスペラント語の文からエスペラント語の質問を考え、他の学生に訊き、訊かれた学生がエスペラント語でその質問に答えるのです。学生たちは、難なく、質問を作りそれに答えていました。

なぜこの授業をとっているのかという質問に対して

3年生女子: ヨーロッパ系の言語の学習が楽になるということで始めました。現在は2年目の履修です。実際に、エスペラント語は易しい。ことばの順序が自由なので単語を知るだけでわかります。また、原文に忠実に訳せるのです。

1年生男子: 好奇心から、珍しいので始めました。他で教えているところはあまりありません。

1年生女子: 欧米文化研究を受講するつもりだったのですが、エスペラント語だった。楽しい。ヨーロッパ文化専攻に進みたい。



学生からの授業の感想

2年生女子: 読みやすい。楽しい。

3年生女子: 佐々木先生の出てきた文について疑問文を作るやり方がいい。

佐々木先生: これは、チョムスキーの文法からヒントを得て始めた。ひとつの文からどれくらい、質問ができるかを考える。また、エスペラント語は、ロシア語同様、ことばの順序が自由であるので、その点は学びやすい。

3年生女子: 小学校でちょっと習ったが、実際にできるとは思わなかった。

4年生女子: フランス語に応用したい。

4年生女子: いろいろな言語を学んだがエスペラントは初級から直ぐにかなりのことがわかるようになる。

検討会

授業に引き続き、検討会が12:00から13:10まで第1小会議室で開かれ、参観した教員によって活発な意見交換が行われました。以下のような発言がありました。

いろいろなことばのテキストを示す事はよい。

佐々木：中国語もある。

どのようにして、このような通常のエスペラント語のテキストが読めるようになったのか。

佐々木：文法を7回やった。その後、原語の本を読んでいる。エスペラントは速く上達できる。

言語の異なるテキストの言語毎にA, B, Cといった記号を付け、さらに段落に番号をつけると説明しやすくなる。

教師が楽しそうに授業をしていたのは良かった。

学生の声が小さい。
この発言に関して、意見が交換された。

- ・少人数家族で育ち、大声を出すことになれていない。
- ・顔を見て話さないことが多い。話すときの態度を教える必要がある。
- ・呼びかけのことばから、教えるようにしている。

大人数(20人程度)の学生が入れる演習室が必要ではないか。

語学の授業、90分は長い。常に教師と応答し続けるので気が抜けない。ミサのよう。休みを入れるのはどうか。集中するので疲れる。学生は熱心である。予習をしなくてもできるようだ。

疑問文を作るというやり方はよい。

共通教育の大人数の授業の場合はどのようにするのか。

佐々木：出席カードの裏に確認テストの答を書かせる。出席調査も兼ねる。昨年度の全学の受講生は208名。うち198名が試験を受けた。

成績はどうつけるのか。

佐々木：期末試験 + 出席 でつける。

教養学部の学生は語学への関心がある。

佐々木：学生のエスペラント語への関心はことばとしての関心であるようだ。

動機づけの低い学生をどうするか。

- ・自由選択科目ならよいだろう。
- ・意欲ある学生だけを相手にすればよい。
- ・授業の数が多すぎるので勉強できない。
学生はエスペラント語をなぜ取るのか。
- ・達成感が得られやすい。
- ・この授業は語学の科目でなく欧米文化研究と
なっているので、単位数が通常の語学の授業
の倍(半期で2単位)ということもあるかも知れ
ない。
- ・語学の授業の単位が他の科目の半分という
ことはおかしいのではないか。

佐々木：エスペラント語訳は言語を忠実に伝えわかりやすい。エスペラント語に翻訳された作品は多い。エスペラント語での国際交流も行われている。

佐々木照央：専門はロシア語・ロシア文学：日本語の著書に『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学 虚無を超えて』(東京、彩流社、2001年)など多数。

編集後記 埼玉大学を、そして教養学部をサポートして下さる皆さまに、私たちの教育活動等をお伝えしようと考えて、このニューズレターを編集いたしました。このニューズレターについて、あるいは教養学部の活動について、ご意見、ご質問などございましたら、何なりとお伝えください。よろしくお願いたします。

編集： 広報委員会： 牧陽一 外山紀久子
連絡先：〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255
埼玉大学教養学部 広報委員会宛
E-mail: koho@kyy.saitama-u.ac.jp